

平成13年度 病院立入検査について

行岡病院 事務長代行 藤原裕之

平成13年12月17日(月)午後1:30より「病院立入検査」が実施されました。

今年度からの法改正に伴い、従来の所轄官庁である北保健センターが実施する「医療監視」という表現が無くなり、大阪市本庁の指導官が入った「病院立入検査」となりました。

検査項目としては

- ①医療従事者の確保について(タイムカード、勤務割表、免許証原本照合等)
- ②院内の事故防止について
- ③院内感染防止対策について
- ④防火・防災対策について(避難誘導等マニュアル)
- ⑤職員の健康管理について(健康診断の受診率)
- ⑥その他(診療放射線並びに毒薬等の管理、施設、給食関係)

等々さまざまな観点からチェックを受けました。

なかでも、本年度からの新たな項目として

の医療事故防止については、医療事故防止対策マニュアルの整備状況、医療事故防止委員会の設置および開催状況、事故発生時の対応を過去の事例も含めて聞き取り調査が行われました。

また、院内感染防止対策についても院内感染対策委員会の設置・会議の議事録の確認、職員・患者への教育、手指消毒設備の装置等手洗いの励行、寝具類及び病室内の清潔保持等がなされているか、を確認されました。

上記の立入検査の結果、特に指導等を受けることもなく、病院運営が「適正に運営されている。今後も維持されたい。」旨の講評を頂き、検査終了の予定時刻より1時間も早く終了しました。

職員の皆様の常日頃の努力に感謝申し上げます。

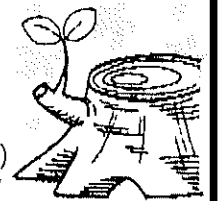
これからも気持ちを引き締め日々の業務を頑張らしましょう。

ひこばえ

Vol.12

—ゆきおかニュース—

行岡病院・行岡学園 広報部 大阪市北区浮田2-2-3 TEL: 6371-9921(代)
行岡病院 <http://www.yukioka.or.jp/> 行岡学園 <http://www.yukioka.ac.jp/>



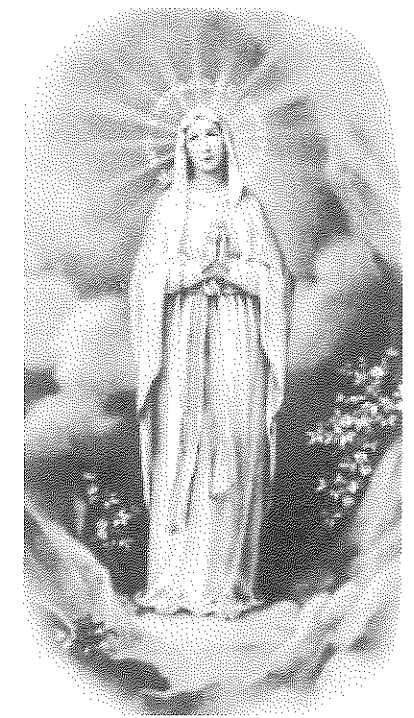
ルルドの泉

理事長 行岡正雄

フランスのピレネー山脈にあるルルドの泉は、難病の奇跡的な治癒をもたらす聖地として有名で、私のぜひ行ってみたい所の一つである。伝説によれば1858年に、14歳の少女がそこで白衣の女性の幻を見たと言われている。女性に言われたとおりに砂地を掘った少女が泉をみつけた。白衣の女性は聖母マリアだったという噂が広まり、人々は群れをなして泉を訪れ始めた。その後多くの疾病の治癒が認められたが、医学的に十分検証され奇跡的な治癒と認められた症例数のみをみると、1940年代には7例、50年代には10例が認められているが、60年代と70年代には1例づつしか認められていない。医学の進歩のおかげで以前は不治の病といわれた結核などがもう該当しなくなってしまったのがその原因ではないかと言われているが、別の角度からみると信仰(心のもちかた)が病気に対して影響を与える可能性を証明しているようにも思われる。

20世紀の医学は驚異的な発展をみせ、遺伝子治療や再生医学など21世紀ますます科学的な見地から発展していくものと思われる。

そしてわれわれは科学万能と考え、病院はこれらの科学的治療を行う場所の中心となっている。それはそれで大変重要なことに違いないが、われわれは限りのある寿命によって生かされており、どんなに医学が進んだとしてもこの現実を変えることはできない。最近、その泉の水のなかにゲルマニウムが含まれていることが発見されルルドの奇跡も科学的に解明されようとしているが、生命に対する畏敬の念を保ち続けるためにもルルドの伝説は21世紀においても大事にしていくべきものではないかと思われる。



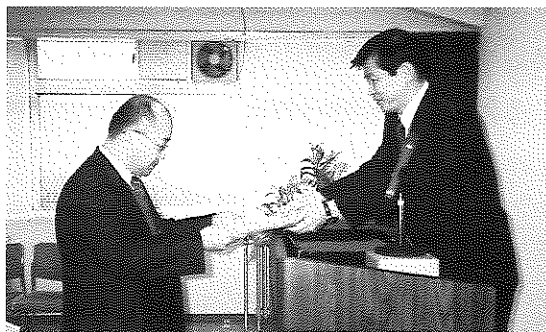
インターネット「ルルドの泉」サイトより引用

永年勤続表彰式

2月15日(金)に、行岡病院・行岡学園合同の永年勤続表彰式が行われ、今回の表彰対象者34名が表彰されました。

理事長の挨拶の後、表彰者を代表して医事課 野部達夫さんが謝辞を述べました。

また、本年は優良勤務者が特別に表彰されたことを報告します。

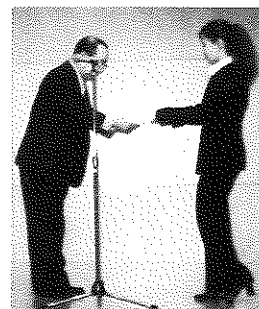


行岡訪問看護ステーション 表彰される

第11回大阪病院学会で「地域に根ざした訪問看護ステーションをめざして」のテーマで発表され優秀演題に選ばれたので報告致します。

内容はアンケートを実施して、現在のサービスを振り返り日々漠然とサービスを提供するのではなく、利用者の声により自分達の看護を見直し、今後の課題を考察した内容でした。

尚、表彰式は平成14年2月26日でした。



今回初めての編集にかかわりましたが、出来上がりはいかがでしょう。今後とも皆様のご協力をお願い致します。

(編集部 迫田 昭)



“プロジェクトS”がスタート

行岡病院 小泉俊彦

はじめに

みなさんご承知のとおり日本の医療保険制度は、今日財政面で非常に厳しい状況にあります。昨年9月厚生労働省は、事態打開のため、平成14年度の医療制度改革に関する試案を発表しましたが、医療保険制度のみならず、保健医療システム、診療報酬体系といった医療制度を構成するすべてのシステムについて、大幅な転換を打出すなど、従来にない規模の改革案となっています。この改革案は「三方一両損」（さんぼういちりょうぞん）とも呼ばれ、患者は自己負担増、保険者は保険料引き上げ、医療機関は診療報酬引き下げと、医療費の伸び率抑制を3者でその痛みを分かち合うとされています。医療機関にあっては、こうした流れに的確に対処することが求められています。このような背景を踏まえ、当病院におきましては“プロジェクトS”が昨年9月にスタートいたしました。“S”の意味は Save（経費の節約、冗費の削減の意味合い）、Strong（堅固、力強い病院の体質作りの意味合い）を含んだものであります。

プロジェクトSの概要

活動目的：医療行政の時代背景を踏まえ、「良質で安価な医療サービスが提供できる体質を構築し、地域社会の貢献度を高め、行岡病院の持続的発展を可能ならしめる」と決められました。

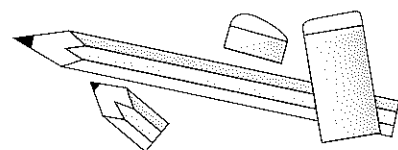
活動の範囲：活動のエリアは3本の柱で構成されています。

第一の柱は節約です。これは患者サービスの低下を招くことなく、医療材料や事務用品、水道光熱費等を一人一人の創意と工夫により、

より一層節約を図ろうとするものです。また活動は一時的なものに止どまらず、職員として、自然体でこうした節約行動が取れる体質作りがゴールとされています。

第二の柱は、仕入れ商品や契約価格の値下げ交渉です。病院には数多くの物品が購入され、また業務委託契約や保守契約など種々の契約が結ばれていますが、これらについての見直を予定しています。

第三の柱はクリニカルパスの導入です。わが国でも近い将来米国DRG/PPS（Diagnostic Related Groups/Prospective Payment System）のようなシステムが導入されようとしています。すなわち現行の出来高払いから「定額支払」へ移行することが予測され、医療費節約の目玉とされています。行岡病院としてもこうした潮流に遅れをとることなく取組んで行こうとするものであります。



活動メンバー：医療部門、看護部門、コメディカル部門、事務部門と病院全体をカバーし、17のセクションから総勢で34名が選出されています。

活動の成果：スタートから5ヶ月間、試行錯誤を重ねながらですが、第一と第二の柱で、年間換算値で約1,000万円程度の経費削減が見込めればと思っています。最後にプロジェクトの道のりは長く“S”にもう一つの意味合いStruggle（もがく、苦闘）がついてまわりそうですが、メンバー一同頑張りたいと思います。皆様のご支援を宜しくお願いします。

第42回学内集談会

行岡学園 歯科衛生科 教務主任 山本洋子

平成14年1月10日（木）病院内多目的ホールに於いて開催された。

1、『学生指導への取り組み』行岡医学技術専門学校 歯科衛生科 専任教員 竹下至乃

学生の気質の変化に伴い学校生活上の基本部分（学力・精神面・経済面など）での問題を持った学生が多くなってきた。教員として7年を経過し、現実社会の要求と入学してくる学生間の隔たりを強く感じている。今回歯科衛生士学生の意識と看護学生の意識を調査し、その意識の違いや学校生活をどのように感じながら通学しているのかを考察しまとめた。入学前、あるいは入学後の取り組みの違い、また職業に対しての意識は看護学生とは異なったものである事が調査した事によって浮き上がってきた。また、学校生活を送って行くなかでの講義や実習について、どのように感じ、どのように取り組んでいるのかという事も知る事ができた。「思っていたよりも大変」だと感じながらも充実した学生生活を送っていると感じている学生が大半を占めており、様々な事を習得していくうちに歯科衛生士という職業を具体的に認識し、自覚しつつある成長した学生の姿が浮かび上がってきた。

2、『開設3年間における学生変動の振り返り』

同校 看護第1学科 教務主任 大野英美子

看護教育カリキュラム改正の主旨にそって開設準備をすすめる理事長の3年課程開学の趣意に基づき“人の心を理解できる、質の高い看護専門職者”を育てていきたいという理念を教育方針とし運営してきている。3年が経過し第一期生の卒業を目前にし、この3年間で6名の学生が退学をしている。1年次に退

学する学生は、入学時自分の意志でない者が多く、進路変更及び結婚準備という理由である。しかし、3年次臨地実習の途中で退学する学生については、「対人関係がうまく結べないことにより、看護師になるという気持ちが次第になくなる」という状況がみられる。この現状を私達もじっくりと分析し実習における学生のストレスとなる要因を再確認することで、学生が退学に至る迄に支援できることはなかったかどうか？学習を強化していきたい。又同時に入学時の面接における学生自身の受験動機等についても、もう少し把握する方法で退学者をなくしていきたいと、今後も検討を続けたいと考えている。

3、特別講演

日野病院志水リウマチ科志水正敏先生『ストレスとリウマチ病』をテーマに講演を頂いた。リウマチ病の診療に携わる中で、リウマチがストレスによって悪化したり、時にはストレスがきっかけとなり発症することを経験的に知っている。そして患者さんにそのストレスをなくすためにアドバイスを行っている。経験も含めストレスとリウマチ病の関係を医学レベルで整理し、現在の研究について解説された。当日は、学園教職員始め病院関係合わせ81名の多数の参加があった。

